



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポストソ連期ロシアにおけるサハリンおよびクリルの主要な歴史研究
Author(s)	ディン, ユリア
Citation	北方人文研究, 13, 139-143
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77247
Type	journal article
File Information	13_09_Din.pdf



ポストソ連期ロシアにおけるサハリンおよび クリルの主要な歴史研究

ユリア・ディン
(サハリン州郷土博物館)

ペレストロイカ、ソ連邦の崩壊を経て、ロシアの歴史学は新しい時代に入った。この新時代は、ソ連の教条主義と政治的検閲の影響下にあった歴史学の巨大な蓄積の再検討をともなうものだった。さらに、歴史唯物主義、マルクス主義的公準の影響から離れたサハリン・クリル史認識を新たに生み出す必要があり、また、それまで開示されていなかった膨大な史料に新たに取り組む必要にも迫られた。

サハリン以外の場所では、サハリン史研究に大きな進展はみられなかった。モスクワの研究者にとってサハリン州というのは、南クリルに関する日本との領土問題に関わってのみ想起される場所であった。その中には、日本の領土要求を叶える方向で平和条約を締結することを提唱する研究者もいれば¹⁾、それはロシアの国益に対する裏切りであると批判する研究者もいた²⁾。この論争に関わったのは主に歴史家ではなく政治学者であった。

サンクトペテルブルグにおけるサハリン・クリル史研究を担ったのは主にピョートル大帝名称人類学・民族学博物館（通称クンストカメラ）で、その研究は、アイヌ、ニヴフ、ウイльтаという先住少数民族の歴史に特化している。著名な研究者には、アンドレイ・ソコロフ³⁾、セルゲイ・ベレズニツキー⁴⁾、チューネル・タクサミ、ヴァレリー・コサレフ⁵⁾がいる。モスクワでは、ロシア科学

1) Славинский Б.Н. Ялтинская конференция и проблема «северных территорий». М.: Новина, 1996. 224 с. [B. N.スラヴィンスキー 『ヤルタ会談と「北方領土」問題』モスクワ：ノヴィナ、1996年、全224頁。]; Славинский Б.Н. Советская оккупация Курильских островов (август- сентябрь 1945 года). Документальное исследование. М.: Лотос, 1993. 144 с. [同 『ソ連のクリル諸島占領（1945年8月～9月）史料に基づく研究』モスクワ：ロトス、1993年、全144頁。]

2) Кошкин А.А., Зиланов В.К., Плотников А.Ю. Русские Курилы. История и современность. М.: Алгоритм, 2015. 400 с. [А. А.コシキン, V. K.ジラノフ, A. Ю.プロトニコフ 『ロシア領クリル 歴史と現代』モスクワ：アルゴリズム、2015年、全400頁。]

3) Соколов А.М. Айны: от истоков до современности. Материалы к истории становления айнского этноса. Санкт-Петербург: МАЭ РАН, 2014. 766 с. [А. М.ソコロフ 『アイヌ：起源から現代まで アイヌ民族形成史のための資料』サンクトペテルブルグ：MAE RAN、2014年、全766頁。]

4) Попытки освоения Россией реки Амур в XVIII веке // Россия на дальневосточных рубежах (к 200-летию со дня рождения Г.И. Невельского): Материалы Всероссийской научно-практической конференции (21-22 ноября 2013 года) / отв. ред. М.В. Гридяева. Архивное агентство Сахалинской обл., Гос. истор. архив Сахалинской обл. Южно-Сахалинск: ОАО «Сахалинская областная типография». 2014. С. 187-193. [「18世紀におけるロシアによるアムール川開拓の試み」M. V.グリヂャーエヴァ責任編集、国立サハリン州歴史文書館発行『極東の境界にあるロシア（G.I.ネヴェリスコイ生誕200年記念）：全ロシア学術・実務者会

アカデミー民族学・人類学研究所のリュドミラ・ミッソーノヴァのウイльта研究もよく知られている⁶⁾。

このように、サハリン・クリル史研究への関心、個別的テーマへの関心は一部みられるものの、大きなものとはいえない。公刊された業績の水準も決して高いものとはいえないことが多い。

サハリン・クリル史に関わる研究者が一定程度存在するもうひとつの拠点がウラジオストクである。研究機関としては、極東連邦大学、およびロシア科学アカデミー極東支部極東歴史・民族・考古学研究所がある。極東連邦大学の研究者がロシア極東史研究の一部としてサハリン・クリル史を概説的に扱うのに対し⁷⁾、歴史・民族・考古学研究所の研究者は、朝鮮人⁸⁾、ウイльта⁹⁾などについて社会的・民族学的研究をおこなっている。

サハリン・クリル史研究の「重責」のほとんどがサハリンの研究者に委ねられていることはいうまでもない。何よりわたしたちには切実な問題なのだから。ミハイル・ヴィソーコフ、マリナ・イシチェンコ、アレクサンドル・ヴァシレフスキー、アレクサンドル・コスタノフらは1980年代末から研究を開始した。彼らは、「サハリン・クリル史研究会」を組織した。同会は1989年10月6日、サハリン州執行委員会決定によって認可された¹⁰⁾。研究会のメンバーたちがこれ以降、サハリン史学への最大の貢献者となる。

ミハイル・ヴィソーコフは、もっとも著名な研究者のひとりである。彼が取り組んだテーマは多岐に渡る。サハリン開基時代の歴史¹¹⁾、チューホフ¹²⁾、ネヴェリスコイ¹³⁾の足跡、経済史¹⁴⁾、先住民¹⁵⁾、

議資料（2013年11月21～22日）』ユジノ・サハリンスク：サハリン州印刷、2014年、187-193頁。]

5) Косарев В.Д. Айны: идеология природопользования // Айны: проблемы истории и этнографии. Южно-Сахалинск, 1988. 183 с. [V.D.コサレフ「アイヌ：自然利用のイデオロギー」『アイヌ：歴史と民族学の諸問題』ユジノ・サハリンスク、1988年、全183頁。]; Таксами Ч.М., Косарев В.Д. Кто вы, айны? Очерк истории и культуры. М.: Мысль, 1990. 318 с. [Ch.М.タクサミ, V.D.コサレフ「アイヌ、あなたは何か？歴史と文化の概説」モスクワ：ムイスリ、1990年、全318頁。]

6) Миссонова Л.И. Уйльта Сахалина: большие проблемы малочисленного народа. М.: Наука, 2006. 295 с. [L.I.ミッソーノヴァ「サハリンのウイльта：少数民族の重要問題」モスクワ：ナウカ、2006年、295頁。]

7) Мир после войны: дальневосточное общество в 1945-1950-е гг. / под общ. ред. В.Л. Ларина. Владивосток: Дальнаука, 2009. 696 с. [V.I.ラーリン総編集「戦後の平和：1945年から1950年代の極東社会」ウラジオストク：ダリナウカ、2009年、全696頁。]; Общество и власть на российском Дальнем Востоке в 1960-1991 гг. / под общ. ред. В.Л. Ларина. Владивосток: ИИАЭ ДВО РАН, 2016. 940 с. [V.I.ラーリン総編集「ロシア極東の社会と権力 1960～1991年」ウラジオストク：PIAE DVO RAN、2016年、全940頁。]

8) Крушанова Л.А. Миграционная политика СССР на Дальнем Востоке (1945 - 1970-е гг.). Владивосток: ИИАЭ ДВО РАН, 2014. 267 с. [L.A.クルシャーノヴァ「ソ連の極東への移住政策（1945年～1970年代）」ウラジオストク：PIAE DVO RAN、2014年、全267頁。]; Забровская Л.В. Власти КНДР и РК в борьбе за симпатии сахалинских корейцев (1990-е годы) // Китай и АТР на пороге XXI века. Тезисы докладов IX Международной научной конференции «Китай, китайская цивилизация и мир. История, современность, перспективы» (Москва, 29 сентября - 1 октября 1998 г.). Часть 1. М. ИДВ РАН, 1998. 212 с. С. 185-188. [L.V.ザブロフスカヤ「サハリン朝鮮人の共感獲得闘争における北朝鮮当局と韓国当局」『21世紀の交における中国とアジア・太平洋 第9回国際学術会議「中国、中国文明、世界 歴史、現代、展望」報告論集（モスクワ、1998年9月29日～10月1日）』第1部、モスクワ：IDV RAN、1998年、185-188頁。]

9) Старцев А.Ф. Ороки - орочёны, а не уйльта! К проблеме этногенеза ороков Сахалина. Владивосток: Дальнаука, 2015. 163 с. [A.F.スタルツェフ「オロッコとはオロチョンである、ウイльтаではない！サハリンのオロッコ民族の起源問題によせて」ウラジオストク：ダリナウカ、2015年、全163頁。]

10) ГИАСО [GIASO: 国立サハリン州歴史文書館]. Ф. Р-53. Оп. 1. Д. 2916. Л. 31-40.

11) Западноевропейские мореплаватели у берегов Сахалина и Курильских островов (XVII-XVIII вв.) / сост.

ロシア人¹⁶⁾、朝鮮人¹⁷⁾の歴史などの研究があげられる。サハリン国立大学歴史・社会・行政学院長、『郷土史ビュレティン』の編集長を長年つとめ、サハリン・クリル史に関する多くの学術書・教育用テキストの編集・執筆にあたった¹⁸⁾。ヴィソーコフの貢献は比類なきものである。ヴィソーコフは、妻であるイシチェンコとともにモスクワに転居したが、サハリン・クリル史研究を続けている。

マリーナ・イシチェンコはサハリン民族学研究の第一人者である。彼女は、サハリン・クリルの亜民族集団としてのロシア人という実に興味深い研究をおこなった¹⁹⁾。他の諸民族についても研究している。また、サハリン州郷土博物館副館長を経てサハリン国立大学教員をつとめた彼女のサハリン史学への貢献は傑出している。

アレクサンドル・コスタノフは、サハリン州文書館行政の長として多大な貢献を成したアーキビストである。それだけでなく、30年以上に渡って、サハリン・クリル史に関する膨大な著作を書き続けてきた人物でもある。文書館行政においては、それまで知られていなかった数多くの文書館資

-
- М.С. Высоков. Южно-Сахалинск: Лукоморье, 2010. 171 с. [М.С.ヴィソーコフ編『西ヨーロッパ諸国のサハリン・クリル諸島沿岸航海 (17～18 世紀)』ユジノ・サハリンスク: ルコモリエ, 2010 年、全 171 頁。]
- 12) Высоков М.С. Комментарий к книге А.П. Чехова «Остров Сахалин». Владивосток-Южно-Сахалинск: Рубеж, 2010. 848 с. [М.С.ヴィソーコフ『А.П.チューホフ『サハリン島』注釈』ウラジオストク/ユジノ・サハリンスク: ルベジ, 2010 年、全 848 頁。]
- 13) Высоков М.С., Ищенко М.И. Комментарий к книге Г.И. Невельского «Подвиги русских морских офицеров на крайнем востоке России. 1849-55 гг. При-Амурский и При-Уссурийский край». Владивосток: Рубеж, 2013. 791 с. [М.С.ヴィソーコフ, М.И.イシチェンコ『Г.И.ネヴェリスコイ『ロシア極東におけるロシア海軍士官たちの勲功 1849～55 年 沿アムール地方・沿ウスリー地方』注釈』ウラジオストク: ルベジ, 2013 年、全 791 頁。]
- 14) Экономика Сахалина: учебное пособие. // под ред. Бок Зи Коу и М.С. Высоков Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2003. 306 с. [ボク・ジコウ, М.С.ヴィソーコフ編『サハリンの経済: 教科書』ユジノ・サハリンスク: サハリン出版, 2003 年、全 306 頁。]
- 15) Высоков М.С. Коренное население Сахалина на пороге третьего тысячелетия // Краеведческий бюллетень. 1999. № 4. С. 18-47.; Айны: Проблемы истории и этнографии. Южно-Сахалинск: ИМИГ, 1988. 183 с. [М.С.ヴィソーコフ「2000 年代の交におけるサハリン先住民」『郷土史ビュレティン』1999 年、第 4 号、18-47 頁; 同『アイヌ: 歴史と民族学の諸問題』ユジノ・サハリンスク: IMIG, 1998 年、全 183 頁。]
- 16) Высоков М.С. Советская колонизация Сахалина на рубеже 20-30-х гг.: выбор пути // Славяне на Дальнем Востоке: проблемы истории и культуры. Южно-Сахалинск, 1994. С. 99-104. [М.С.ヴィソーコフ「1920～1930 年代の交におけるソ連のサハリン植民: 方法の選択」『極東のスラヴ人: 歴史と文化の諸問題』ユジノ・サハリンスク, 1994 年、99-104 頁。]
- 17) Высоков М.С. Перспективы решения проблемы репатриации сахалинских корейцев в свете опыта Израиля, Германии и других стран // Краеведческий бюллетень. 1999. № 2. С. 94-102. [М.С.ヴィソーコフ「イスラエルの経験から考えるサハリン朝鮮人帰還問題の解決策」『郷土史ビュレティン』1999 年、第 4 号、94-102 頁。]
- 18) Высоков М.С. История Сахалина и Курил в самом кратком изложении. Южно-Сахалинск, 1994. 95 с. [М.С.ヴィソーコフ『最も簡潔なサハリン・クリル史』ユジノ・サハリンスク, 1994 年、全 95 頁。]; История Сахалинской области с древнейших времен до наших дней. Южно-Сахалинск, 1995. 272 с. [同『サハリン州の歴史 古代から現代まで』ユジノ・サハリンスク, 1995 年、272 頁。(邦訳) 板橋政樹訳『サハリンの歴史: サハリンとクリル諸島の先史から現代まで』北海道撮影社, 2000 年。]
- 19) Ищенко М.И. Русские старожилы Сахалина (вторая половина XIX - начало XX вв. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2007. 360 с. [М.И.イシチェンコ『サハリンのロシア人古参住民 (19 世紀後半～20 世紀初頭)』ユジノ・サハリンスク: サハリン出版, 2007 年、全 360 頁。]

料を学界で利用可能にしたことで著名である。そのおかげで、サハリン・クリル史の未知の領域に新たな光がもたらされた²⁰⁾。残念ながらコスタノフは2014年にこの世を去ったが、彼の貢献はとてつもなく大きい。

アレクサンドル・ヴァシレフスキーは有名な考古学者で、オホーツク文化の発見者である²¹⁾。サハリン国立大学考古学博物館を創設し、サハリンにおいて学派と呼ぶべき研究者群を築き得た唯一の人物といってよい。クリル史をはじめ、考古学以外の分野でも活躍している²²⁾。彼はいまでもユジノ・サハリンスクで活動しており、サハリンの学界に貢献している。

この4人の業績で最も重要なのが、『古代から現代までのサハリン・クリル諸島の歴史』である²³⁾。サハリン・クリル史の主要テーマをほぼすべてカバーした教科書で、2008年の出版以来、サハリン州の歴史を学ぼうとする学生、生徒、教員たちによって熱心に読まれている。

彼ら以外にもサハリンでは数多くの歴史家、考古学者、民族学者らが活躍している。彼らの研究は個別的だが、ユジノ・サハリンスクで出版される定期刊行物で発表されている。

サハリン・クリル史に特化した最初の定期刊行物が雑誌『郷土史ビュレティン』である。既述の通り、ヴィソーコフが編集長をつとめた。同誌は26年ものあいだ年4回刊行されたが、財政難により残念ながら廃刊になった。また、1995年発刊の年報『サハリン博物館報』にも、国外の研究者を含むサハリン内外からの寄稿がある。発行元のサハリン郷土博物館長は、同誌の学問的水準を高め、2019年から年4回の刊行とすることを決定した。

サハリン州郷土博物館では、サハリン州政府文化・公文書省の支援を得て、民族学に関する年報も出版している。『プロニスワフ・ピウスツキの遺産研究所通信』は1998年、当時博物館長だったヴラディ斯拉フ・ラトウイシェフによって創刊された。同誌の刊行は20年続いたが、ピウスツキ研究所が博物館の組織から外れたことにともない、休刊となった。博物館ではその代替として2017年から『民族学報』を出版し、現在まで2号が刊行されている。

サハリン・クリルの先住民に関する民族学的研究の基礎を築いたのはサハリンの研究者だということは特筆すべきことである。ニヅフ、ウイルトア、アイヌ研究に顕著な功績を残したのはミハイル・プロコフィエフ上級研究員、タチアナ・ローン元館長ら博物館員である。

サハリンの研究者たちは他にも、研究成果を発表する場をつくろうと試みてきた。特筆すべき試みとしては、国立サハリン州歴史文書館による年報『歴史講座』、サハリン国立大学による『ロシアと太平洋島嶼世界』である。両者とも2号まで刊行したが、諸事情により残念ながら廃刊となった。

20) Костанов А.И. Документальная история Сибири. XVII - середина XIX вв. (Историко-архивоведческое исследование). Владивосток: Дальнаука, 2007. 352 с. [A. I. コスタノフ 『シベリアの文書史 17世紀～19世紀中葉（歴史文書学的研究）』 ウラジオストク：ダリナウカ、2007年、全352頁。]

21) Василевский А.А. Каменный век острова Сахалина. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2008. 412 с. [A. A. ヴァシレフスキー 『サハリンの石器時代』 ユジノ・サハリンスク：サハリン出版、2008年、全412頁。]

22) Василевский А.А., Потапова Н.В. Очерки истории Курильских островов. Южно-Сахалинск: Сахалинская областная типография, 2017. 416 с. [A. A. ヴァシレフスキー、N. V. ボタボヴァ 『クリル諸島の歴史概説』 ユジノ・サハリンスク：サハリン州印刷、2017年、全416頁。]

23) История Сахалина и Курильских островов с древнейших времен до начала XXI столетия / отв. ред. М. С. Высоков. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2008. 712 с. [M. S. ヴィソーコフ責任編集 『サハリン・クリル初頭の歴史 古代から21世紀初頭まで』 ユジノ・サハリンスク：サハリン出版、2008年、全712頁。]

また、サハリンの諸文化機関はサハリン・クリル史研究に関する学術会議を定期的で開催し、種々の側面に光を当てている。サハリン州公共図書館では、ソ連時代に活躍した著名な郷土史家アレクセイ・ルイシコフを記念した「ルイシコフ講座」が、1998年以來3年に一度開催されている。会議での報告は、論集『ルイシコフ講座』としてこれまでに6号公刊されている。

チェーホフが残した足跡については、チェーホフ『サハリン島』文学・芸術博物館が研究している。同館は年に一度、学術会議「チェーホフ講座」を開催し、その報告集は1998年以來20冊に及ぶ。サハリン州郷土博物館でも2年に一度、国際会議を開催し、その成果を論文集として公刊する予定である。

『サハリン・クリル歴史図書館』プロジェクトも重要である。このプロジェクトは、サハリン州政府文化・公文書省の支援の下、サハリン・クリル史の重要な業績を刊行している。

ソ連崩壊後の史学史の特質は、検閲からの解放である。その結果、それまで閉ざされていたテーマに関する業績があらわれるようになった。すなわち、樺太史、サハリン朝鮮人史、あるいは日本人史などである。これらのテーマは、新たに開示された文書館史料に基づいて研究がおこなわれている。樺太史についていえば、戦後に接収した膨大なファイルが国立サハリン州歴史文書館に保管されており、研究者の利用に供されている。もっとも、樺太史に関する業績はさきわめて少ない。なぜなら、それらの文書館史料を調べるには日本語から翻訳しなければならず、サハリンの研究者には手が出ないのである。

1990年代から2000年代にかけての大変動の後も、サハリンの史学史はいくつかの危機を経験してきた。たしかに、歴史研究への国の支援も増え、安定した基盤に支えられて、サハリン・クリル史の重要問題の研究がおこなわれるようになった。その研究を担っているのが、サハリン国立大学、サハリン州郷土博物館、国立サハリン州歴史文書館である。しかし一方、有力な学派が存在せず、研究は細分化され、研究者たちは孤立している。長年大きな支えとなっていた研究者たちはこの世から、あるいはサハリン・クリルから離れてしまい、新しい若手はほとんど育っていない。

まとめると、ロシアにおけるサハリン・クリル史学史は、検閲とイデオロギーの軛から解放、および、ヴィソーツコフ、コスタノフ、イシチェンコ、ヴァシレフスキーら優れた研究者たちの努力によって、大きな成果を取ってきたといえる。サハリンの研究者たちが総力をあげることによって、サハリン・クリル史の全体像が描き出され、さらに研究を発展させることが可能となるだろう。

(天野尚樹訳)

